

現代短歌が見つめるもの 武富純一

・古文書のなかに見いでし／よごれたる／吸取紙をなつかしむかな
石川啄木

・ハブられたイケてるやつがワンランク下の僕らと弁当食べる
うえたに

若い世代の多くは「吸取紙」を知らないだろう。逆に二首目、もし啄木が読んでも理解できないのではないか。

言葉は常に時代の中から生まれ、そして流動している。十年ぶりの改訂で話題となった広辞苑の第七版は新規に約一万語を収録したという。「短歌」ではなく「現代短歌」と言うとき、「現代」が背負っているその意味は深い。「短歌」四月号の特集「現代ならではのテーマをどう詠うか」をこんなことを思いつつ読んだ。

介護、労働、ジェンダー、ポップカルチャー、時事、そして「短歌の重さ」とは」等について歌人たちがそれぞれの現代的な側面に切り込んでいる。

栗木京子は「普遍性から浮上するもの」として、現代は介護や古い歌が多いが、実はそれらはずっと昔からあり、現代に色濃く上ってきた背景には医療や介護の進歩によって飛躍的に寿命が延びた点があり、一方でただ命があれば幸せなのかという深刻な問いに突き当たっている苦悩を述べる。

また、新しいテーマとして人工知能（AI）を挙げ、平成30年

度の角川「短歌年鑑」座談会「人工知能は短歌を詠むか」の「ロボットもことばを持たば苦しまむ虹の下ゆく鉄腕アトム（坂井修一）」に触れ、『短歌に特化しつつ、「言葉」や「心」という局面から関心を持ちつつけること』で次の時代へつながるテーマが生まれてくると結ぶ。AIは将来、答（ゴール）の決まっている課題はすべてこなせるようになるが、短歌は答が決まっていないので、ここが人間側の最後の砦になるだろう。やがてはアトムの如く自己の愚かしさに悩み続けるフレンドリーなAIが登場し、それを「心」と読む歌が大量に生まれ出ることだろう。

また、斉藤斎藤は「短歌の重さ」について、歌のテーマで一般に重いとされるのは「戦争貧困人災天災自分の病気に他人の死、つまり命に関わる歌だ」としながら、戦争の歌に軽さを感じることもあればコンビニでおにぎりを買う歌に胸を衝かれることもあり、「テーマも文体も重々しければ重い歌というわけでもないのは何故か」を「毛穴が開いているか否か」という表現で論考する。「毛穴が開いている」とはつまり感性が鋭敏になっている状態のことなのだろう。斉藤は、毛穴が開じたか開いたかよく分からないくなったときに、その「疲れている」という認知に嘘をつかないでいたい：閉じているのに開いているふりをしてしまえば私の歌は軽いままだろう」と自己の作歌姿勢を厳しく戒めている。

・ころよく／我にはたらく仕事あれ／それを仕遂げて死なむと思ふ

ふたたび啄木を引く。今も昔もこうした思いの本質は何ら変わらない。ずっしりと変わらぬ短歌の基盤は常に意識しつつ、現代という眼前の変動を見つめてゆきたい。